



Title	見本市通信の受容について
Author(s)	江口, 豊
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 26, 127-139
Issue Date	2018-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68747
Type	departmental bulletin paper
File Information	127-139_Eguchi.pdf



見本市通信の受容について

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授

江口 豊

On perception of the Messrelation

EGUCHI Yutaka

abstract

The Messrelation had a relatively vast readership. Nevertheless, the state of preservation of this ambiguous publication in private and official libraries is evidence of its unclear importance. For the clients the half-year periodical had rather an almanac-like character. As with all other printed media, there was always a certain tension between the local or state authority and the printers and editors of the Messrelation. The half-year periodical with many imitators had two further points in common with the first newspaper in Strassbourg in 1605: the word "relation" in the title and the image of Mercury.

An unconscious motivation to acquire the Messrelation was possibly an imitative attitude of the readership, i.e. the middle class of the society, towards the news gathering behavior of the upper classes through the weekly handwritten news.

0 序

先に見本市通信という16世紀後半のおよそ二十年間に成立したと考えられる新しい印刷媒体とその両義性について論じたが、その受容の実態についてさらに検討するのが小論の目的である。ここで問題にする受容とは、誰が読者であったのか、そしてどのような反響をよんだのかという問題になろう。もちろん、400年以上以前の印刷物であり、しかも書籍のように製本師により製本されることがむしろ考えにくい冊子であり、読者とされる人々が読後にどのような思いをもったのかについて手がかりとなるものは極めて見出しにくいのが事実である。読者の一部としての権力者が印刷物の内容をどう受け止めたのかについては、権力者側にとって「問題」となった場合には、検閲や著者、印刷人、発行人に対する処罰等の処分記録で浮かび上がるケースがある。また受容の前提としての販売実態についてもやはり手がかりは微々たるものであろうと推察されるが、先行研究の記述などを辿ってみたい。

見本市通信の受容に限らず、見本市通信研究の重要な手がかりとして前書きなどに着目すべきことが指摘されている。Bender (1987, 64.) は、長年にわたる研究経験から「見本市通信の前書きは活字メディア史の研究者にとっての宝庫である。そこには、自分をどう捉えているのか、自らの動機、問題と困難の数々、ニュースの入手先や性格、そして読者に関する編集者たちの発言が含まれている」というのである。したがって以下で論じる先行研究でも見本市通信の前書きを論拠にする場合が目につくのは当然かもしれない。

1 見本市通信成立研究に関する若干の補足

江口 (2017b) でも紹介したとおり、当初から統一したタイトルすら存在したわけでもなく、いわば新種のメディアカテゴリーとして見本市通信というものが相当の年数をかけて成立していった。意図せざる創始者であったAitzingも彼の同時代史を編纂していたつもりが、時間的な経過に沿った内容の定期的な更新に基づく定期刊行物という側面を認めざるを得なくなり、「1588年の第4回の『POSTREMA HISTORICA』の刊行によってはじめて、同時代の連続的な性格をもった年代記を公にしている」と自覚したわけである (Körber 2013, 10) こうした見本市通信編集人としてのAitzingの認識変化に影響した要因として、Körberも、「編集人と出版人との関係、印刷監督、宗派上の対立、個人的な経済状況と依存関係」や「競合による葛藤、複製、例えば三十年戦争などによる一般的な経済的困難、ニュース流通での偶然、ときには読者からの反響」も前書きに反映されるかたちで要因として確認している (Kör-

ber 2016, 25.)。しかし、もっとも重視すべきは、好評な売り上げに反映された読者・購買者の受容であろう。Körberの指摘に重なるが、見本市通信研究のもっとも重要な貢献をなした一人に挙げられるStieveも、「ケルン移住以降の経済的困窮」、ハプスブルク宮廷への出仕への強い願望（Aitzingの父や祖父など代々宮廷勤めを経験している）などの動機面の要因にも触れている（Stieve 1881, 219.）が、それ以上に時代背景としてのトルコ戦役、オランダ独立、ケルン移住直後に起こるケルン戦争に代表される宗派対立など、手書き通信を讀うことができない社会層が、緩やかな即時性を備えた最近の出来事背景理解・再確認として大変重宝していたのではないかという点も推測できる。こうした点を見本市通信の内容研究の意義としてKörberは捉え、「報道内容」の信憑性には留保がつくものの、「読者が何を知りえたか、……何が重要であるのかあるいは何が興味深いと取られる『世界についての知識』として入手可能だったのか」が見本市通信には示されていて、これは「近世のニュース価値の基準を明らかにしている」と述べている（Körber 2016, 26.）。

もう一つStieveの指摘で目を引くのは、情報の信頼性や独自性という点に関して、同時代や後代の模倣者たちとAitzingとの相違として、情報の質の高さがあったという点である（Stieve同上, 226.）¹⁾。その理由は、明らかにケルン大司教エルンストとの親密な関係に基づく公文書類などの一次資料を直接入手できたことと考えられる。

▶1 Stieve (1887, 226.)はLautenbachの「情報が詳細で良質である」ことを評価しているが、Aitzingには及ばないと見ている。

2 見本市通信と所蔵

印刷物の受容に関して、販売後の所蔵状況はいわばその一端ということもでき、購入者にとってどのような位置づけをもっていたのかを示すヒントととれる。見本市通信は基本的に冊子の形態で販売されたと考えられる。それは必ずしも製本されることを妨げるものではない。当然のことながら、「見本市通信は最初の購入者により製本される場合もありえたとし、製本されないままのこともあったであろう。後に民間などから公的な図書館に移管され、所蔵される段階で、見本市通信だけでそのまま製本されるか、他の政治的内容の印刷物と合わせて製本されることもあった。こうした事情を反映しているのが、ドイツ各地の見本市通信の所蔵状況であり、これが現在の研究調査の障害ともなっていることは明らかである」（Körber 2016, 21.）。つまり、現在の図書館や文書館で見本市通信単独で図書・文書管理上の単位として登録されている保証はないのである。それどころか他の登録カテゴリーに紛れ込んでいることもあり、それらの一部として扱われている可能性が現在も今後もあるということを意味している。統一的なタイトルが存在しなかったこともこれに拍車をかけているのはいうまでもない。

Körberはこうした事情について、「見本市通信はたいてい個々の冊子として購入され、読まれ、内容を認識された。読者で複数の見本市通信あるいは多

量の見本市通信を継続して購入しようとしたものも、それらを同種のものとして製本しようとしたものもわずかであっただろう」と推測している（Körber 2016, 22.）。さらに、「忠実な購入者であり読者であった学者などや修道院のような組織も、（いわばシリーズとしての）同一の出版人による見本市通信を購入できたわけではない」（Körber同上.）として、所蔵状況から見本市通信の定期刊行物という性格を否定する論拠とも考えられることを指摘している。

3 見本市通信の受容

3.1 読者像もしくは購入者像

見本市通信が商品としての印刷物、すなわちメディアサービスであることから、そのターゲットをどう考えていたのかについて、いくつか指摘がある。

Rosseauxは、「見本市通信の受容者については体系的な調査がほとんどないため」、「読者の多くが大学での修学経験のある都市の指導者層や国家の権能を担うエリートたちからもっぱら形成されていた」と述べている（Rosseaux 2004, 99.）。

若干時代が後ろにずれてしまうが、「1630年代の見本市通信のいくつかには一冊あたり5～9バツツエン (Batzen) という価格が印字されていたが、15バツツエンが1グルデンに相当したから、見本市通信1部の値段は平均して半グルデンだったことになる」（Körber 2016, 29.）。「1636年にこの金額で、牛肉6.6Kg、小麦57.9Kg、製粉した小麦粉7.56Kg、卵55個、オランダ産チーズ840g、カナリア諸島産砂糖300g、胡椒300g、1.5Kgの米、10リットルのレーゲンスビール、1ポンド以上の蠟、50枚の屋根瓦……、亜麻布3.75エレが買えた」（Krieg 1953, 23f.）²⁾。

また、Körberは当時の収入や物価などについて別の例も示している。「同時代の大尉は月給100グルデンをあてにできたので、見本市通信の購入は痛くも痒くもなかっただろう。村の司祭の年収は17世紀後半でも100グルデンだったから、年に2、3回の見本市通信は辛うじて賄えたであろうし、妻と二人で年に25グルデン稼いでいた料理人にとっては見本市通信の購入はよほどよく考えた上でのことだっただろう」。「貴族階層の男女、固定給を得られる待遇のよい学者とその夫人、高位の将校と夫人、……裕福な職人や気前のよい親をもった学生」が読者層に挙げられている（Körber 2016, 29f.）。注意を要するのは、三十年戦争の期間（1618年から1648年）はインフレーションが甚だしい時期であり、「もっとも稼ぎの良いのは、もちろんこの大なる殺人、掠奪、強奪に従事する職人」たる軍人・兵士だったことである。見本市通信成立期の1580年代からの20年、30年間にもケルン戦争やトルコ戦役など大小の戦争行動があったことを考慮すると、収入の職業的相違に関して16世紀末と大きな相違はないのかもしれない。

さらに、以下の1590年春の見本市通信の「前書き」に、読者層に関するヒ

▶2 ここに挙げられた数量は、Krieg (1953) が1グルデンで購入可能とされるものを単純に二分の一にした数値である。

ントの一つがあることが指摘されている (Stalljohann 2011, 121.)

慈悲深い主たる選帝侯閣下がラテン語のみならず、イタリア語、フランス語や他の諸語さえも巧みで、法の言葉をドイツ語で説明する必要もないほどでおられるのはもちろん存じ上げてはいるものの、……ラテン語に通じない、他の外国語の知識の無いままかもしれない他の者たちには不都合でもないと思慮しておりますし、こうしたやり方に他意はございません (HISTORICA NOVEN MENSIVM 1590, 6f.)。

当時の常識として、ラテン語の知識は大学やその前段としてのラテン語学校での修学を前提にしているために、ドイツ語でしか理解できない読者層を想定していることが読み取れるのである。また、Jacobus Francusの筆名で見本市通信を執筆したChristoph Conrad Lautenbachがはっきりと読者に「誠実な方々、身分の高いと低いによらず (ehrlliche Leuth, hohen und nieder Stands)」という言い方での呼びかけにより、都市指導層やエリート公職者に限定しない事例も紹介されている (Stalljohann同上。) はては、フランクフルト近郊Urselで発行された1602年の見本市通信の前書きには「普通の人 (gemeinen Mann)」とか、その「乏しい持ち金 (für sein geringes Gelt)」で良質なニュースを手に入れられるという趣旨の表現も見受けられる (Stalljohann同上.)。

3.2 読者・購入者を規定する条件

上で紹介したようなメディアのターゲット像を総合的にまとめようとした試みもある。Rosseaux (2001, 416.) は、見本市通信の受容者の要件として、(1) 識字能力、(2) 世情に対する興味や関心の源泉たる好奇心、(3) 購入のための経済力、(4) 当時の販売システムに照らして現実的な購入可能性 (居住地による制限) の四点を挙げている。

(1) 識字能力

Rosseaux (2001, 418.) は、「16世紀末神聖ローマ帝国内での識字率を全人口の5%、……絶対数で約80万人……」と見なしている³⁾。5%という数字については2%から4%という別の数字が挙げられることもあり、都市部と郡部、社会階層によって大きく異なることも当然想定できる。都市部での識字率でさえも、「17世紀前半で30%などという数字は非常に高い突出した値とみてよい」状況だった (Rosseaux同上, 420.)。

この識字率について、エンゲルジング (1985, 75.及び81.) は16世紀に非識字者が減少したことを前提に、いくつかの要因と考えられるものについて事例や数値を挙げている。とくに学制の導入 (ただし17世紀後半以降) も大きなプラス要因とされるものの、これも現代や18、19世紀のように徹底されたものではなかったらしい。また、15世紀の活版印刷術の発明と前後して眼鏡の職業的生産が始まったことも指摘されている (エンゲルジング1985, 46.)。書籍やニュース媒体同様、誰でもが購入し利用できたものではないことは想像に難くない。識字率の変動との関連は無いが、一度書籍などの読者

▶3 そもそも5%という数字の根拠は挙げられていない。これに関連してWittmann (2011, 76.) も5%の根拠は挙げないままで、「16世紀が経過する (百年間) なかで1%、2%の識字人口が5%以上に増加した」と述べている。Wittmann (2011, 81.) は一つの示唆を与える事実として、ルター『ドイツのすべての都市の参事に宛てて』の影響で1524年以降図書館が増設されたことを紹介している。

となった者ができるだけその能力を維持したいと考えるのは当然であろう。因みに、42行聖書が刊行されたことについてピッコロミーニ枢機卿がスペインの枢機卿に宛てた手紙で「眼鏡なしでも読める」という表現を用いている。

また当時の購読形態について、ラテン語で読む者、ドイツ語で読む者、挿絵などのイラストに頼って理解する者という三分類が提起されるが（エンゲルジング同上，51.）、見本市通信で問題になるのは最初の二つのグループである。見本市通信は平均で100ページに及び、イラストがほとんどないからである。もちろんこれには、音読したものを聴いて理解する可能性が加わる（Rosseaux 2001, 422.）。17世紀末ではあるが、「新聞を読める者、聞いて理解できる者」という言い回しがある通りである（Stieler 1969, 39.）。

(2) 世情に対する興味や関心の源泉たる好奇心

Rosseauxは、Lucien Fevreの感性（sensibilité）の概念にも触れながら、近世の人々にとって、「日常的な事柄と特別なこととの間の敷居が今日よりもはるかに低かった」ということを主張する。その傍証として、見本市通信のニュースの多くが「現代の我々にはそれほど報道に値しないように見える」とも述べている。また、チラン製作者、銅版画家、印刷業者、新聞発行人なども、読者に好奇心が欠けていることについて嘆いているケースはなく、ストラスブルの新聞発行人ヨハン・カロルスのように「幾年も以前に起こった話ばかりでなく、現在の我々の時代で日々新しく起こっていることにもはるかに関心を向けている」と逆のことを言い立てている（Rosseaux 2001, 424.）。同時にRosseauxは、チランやパンフレットが前提とする好奇心が「最新の出来事に関する解釈や説明」に向けられていたのに対して、「新聞の定期購読は時代の経過への継続的な関心を前提にして」おり、「同じことが見本市通信にもあたるが回顧的な形式に重点が置かれている」。「過去6か月間の出来事についてコンパクトな概観」を与えるのが見本市通信の機能だとしている（Rosseaux 2001, 425.）。

(3) 購入のための経済力

Rosseaux（2001）の研究の中心的な関心対象は1620年から1626年のインフレーション期間であり、Aitzingが見本市通信を制作、販売していた1580年代から1590年代、あるいはカロルスが最初の印刷新聞を販売しだした1600年代の最初の10年間とも経済情勢を完全に同列に論じられないであろうことは注意しておく必要がある。以下に紹介する印刷メディアの値段と食料品などの物価との比較もあくまで参考に止めるべきであろう。

エアフルト市による1622年の課税制度によれば、3クロイツァーで購入できるものとして「4ポンドのパン、2ポンドの小型パン（ドイツ語でいうBrötchen、ただし最良の小麦を原料にしたもの）、薄いパンケーキ1枚、最良の牛肉1ポンド、1ポンドの牛肉の煮凝り（Sülze）」が挙げられている（Rosseaux 同上，427.）。これに対して、四つ折り版13枚の全紙で作成された見本市通信は約10クロイツァーであった。新聞の年間購読は約1ライヒスターラー（1.5グルデンであった）。「日常の生活費に加えてこれらを支払う」必要があったのはいうまでもない。「アウクスブルク市の社会階層を例にとれば、明らかに住民の半分以上が潜在的な（メディア製品の）受容者としては対象にならな

▶4 Schilling (1990, 40) 参照。

いということを意味している」(Rosseaux同上, 427.)。Rosseauxはアウクスブルクで同時代にゾウの見物料として多くの市民が5クロイツァーを支払ったことも紹介して、2~4クロイツァーとされる⁴⁾ チラシやパンフレットを購入することは可能だったかもしれないと述べている。

Rosseauxはまた、同時代の他のメディアである「パンフレットやイラスト付きのチラシに比較して、見本市通信はどちらかといえば高価なメディアの一つであった」としている(Rosseaux 2001, 263.)。「逆に内容上近い新聞(Rosseauxは週刊新聞が複数存在していた1620年代を考察の対象にしていることに注意)と比較すると、安価な選択肢であった。年間の新聞購読がほぼ1ライヒスターラー(約1.5グルデン相当)と帳簿に載るのに対して、春秋それぞれに一部つつ、年間二部の見本市通信の購入には……半グルデン必要だった。つまり、わずか約三分の一の値段で、新聞にしかなかったニュースの即時性をあきらめる覚悟がありさえすれば、一年間の政治的軍事的な重大事件に関する簡潔な概観を手にすることができた」ことになるというわけである(Rosseaux 2001, 263.)。

(4) 当時の販売システムに照らした現実的な購入可能性

Rosseauxは販売システムから想定できる顧客の条件としていささか唐突に「17世紀初期の都市もしくは帝国都市の市民であるか、(交通地理的に)到達可能な近辺に居住する者」という点を明記している。これは印刷所の設置が認められていた帝国都市などとの距離が、印刷物の流通の点で自ずと制約となっていたことを単に指摘していると考えるべきであろう(Rosseaux同上, 428.)。

3.3 販売の実態

Körberは、見本市通信の販売実態について、「出版人はおそらく見本市会場で個々の購入者に現金で販売したであろうが、それは本当にわずかな部分であり、出版人にとっての大部分の顧客は書籍業界の関係者であり、それは印刷人、出版人、書籍商もしくはそのすべてであった。こうした人々はほかの書籍との交換により見本市通信を自らの品ぞろえに加えたのである」と述べている(Körber 2016, 20.)

「書籍見本市は、見本市通信の出版人にとっては、競合相手を観察するもっとも重要な機会だった。競合相手の制作したものを手に入れることもでき、なかにはそのまま複製印刷することさえもした」。ただし、競合相手の見本市通信に対応したものを制作できたのはふつう次の見本市だった(Körber 2016, 20f.)。

一部の見本市通信にはすでに販売価格が印字されたものも確認されているが、おそらくそれはいわば小売り価格(現代でいう定価)であり、見本市での価格を反映したものではないと推測されている(Körber 2016, 21.)。また、見本市通信の場合、新聞や雑誌のように定期購読のシステムはなかったが、フランクフルトの編集者Reinhardtの前書きには「多くの購読者が見本市通信を購入しているのは、親の世代もそうしてきたからだ、と、半ば誇らしげに、そして半ば自嘲的に述べている」とあるように、購入が習慣化していること

を示唆している（Körber同上。）。

4 監督対象としての見本市通信

Körberは、見本市通信という媒体で編集者が自身の見解を示す可能性があったことを述べている。「すべてではないが多くの編集人が、自分自身の省察を盛り込み、確信を表明するか、あるいは政治的な決断が正しかったか間違っていたか、それがなぜかを判断するのに、自分の裁量で決定できた印刷空間を利用した」（Körber 2016, 27.）。

しかし、これにも限界があった。「侮辱と受け取られることが表面化すれば」、「印刷人や編集人にとって困難な状況」となることもあった（Körber 2016, 27.）。

まず、見本市通信も印刷物であることから、カトリック教会を含む統治者から常に一定の注意を向けられていたであろうことは、活版印刷登場以降の監督制度を考えると当然と思われる。また、「それぞれの所領領主や皇帝家への忠誠は、出版人や編集人にとっては自明のことだったが、その理由は、お上が管理するだけでなく、印刷特権にせよ他のやり方にせよ見本市通信の公刊を保証してくれたからである」（Körber 2016, 27.）。

見本市通信の記述内容について、Körberはまず大まかに「土地土地の検閲が影響しない限り可能なことは多かった—統治者の宗派から『極端に』外れるような主義・信念は例外として—」（Körber同上, 17.）と述べている。さらに「すべてではないが、多くの編集人が、自分の裁量の対象となる印刷空間を、省察を盛り込んだり、信念を表明したり、政策上の判断が正しかったか間違っていたか、またなぜそう判断されるのかを評価するために、利用していた。ただし、高位の首長の判断をあからさまに批判したり、その判断能力を疑うかの如きことは決して許されなかった」とまとめている（Körber同上, 27.）こうした不文律を破れば、禁固刑、冊子の没収、印刷発行業の停止、訂正記事の掲載などが待っていた⁵⁾。

印刷物としての見本市通信をめぐる監督の実例のうち、以下にBenzing (1961) とKörber (2016, 188f.) から二つのケースを取り上げてみる。

Benzing (1961) が報告しているのは、1590年にケルンでMichael von Aitzingが編集人を、Gottfried von Kempenが印刷人兼発行人を務めて発行された見本市通信についてである。事実関係の経緯は、1590年7月4日Wolf von Stolberg伯爵⁶⁾ からのケルン市参事会宛の苦情の手紙と1590年8月8日ケルン市参事会からの返信に記されている。苦情の対象は1589年9月19日発行の見本市通信（Relationis historicae continuatio）83ページ以下に掲載された件であり、ハルバーシュタット司教Henricがデンマーク王の姉妹である二人の皇女の一人Elisabethとの婚儀を7月24日に予定していたが、5月13日に父ブラウンシュヴァイク侯Juliusの死去により、領地について4人の兄弟での処理が問

▶5 戦時の権威交代による影響もありえた。三十年戦争、オーストリア継承戦争、七年戦争、ナポレオン戦争などの戦時には、領主の変更により、出版人や編集人を巡る状況に変化が生じることがあった（Körber 2016, 27f.）。

▶6 Wolf von Stolberg伯爵は、記事の中のハルバーシュタット司教Henricが後にブラウンシュバイク公になったときの代官（1589-1594）を務めた人物である。

題となったことである。さらに1590年4月末の見本市通信（77ページ）でも、話の続きとして、「1590年12月Knypins博士が3名の人物とともにノルウェーに派遣され、コペンハーゲンの宮廷にスコットランド王ジェイコブズ6世が王妃Anna（ブラウンシュヴァイク侯Henricの結婚相手の姉妹）を訪問したことなども報じている。ケルン市は、ただちに印刷業者Gottfried von Kempenを逮捕、幽閉したが、著者Aitzingは捕捉できない。Kempenは、内容には関与していないし、高位の人物については報じないように著者や校閲者に依頼していたと言ひ逃れし、保釈金の支払いと必要に応じた召喚に応じることを約束して、保釈された。Aitzingは所在不明のままで、1591年3月26日づけで次の見本市通信を著している。そこでは、ブラウンシュヴァイク侯Henricと皇女Elisabethとの婚儀が高貴な参列者を迎えて、復活祭にクローネンブルクで催されたことのみを報じ、2ヶ月後のヴォルフエンビュッテルでの婚儀については書かないと明言して、自己規制したことを示している。

一見すると、何が問題になったのかすら明瞭ではない。また、当時の印刷監督では問題の原因を必ずしも明示しないこともあった。Benderは、この外交的抗議の原因として、文章全体が高位の人物に対して十分な敬意を欠いたと受け取られたこと、ブラウンシュヴァイク侯Henricの行状（城から遠く出て、領地を変装して鉄砲をもって彷徨き、農家などの近くで鴛鴦を撃ち殺したとか豚の首を落としたりしたこと）を記述したことで「自己顕示欲の強い」、「配慮を欠いた」、「粗暴な」性格という「印象を与えかねないことの二点だと指摘する（Bender 1978, 287.）。同時にBenderは、実際の記事の文章に関してのいわば「すれ違い」をも指摘する。例えば1590年の春のAitzing版の見本市通信とされるものがただ一種類だけ現存するとは限らず、場合によっては複数の複製が存在する可能性もあり、極端な場合に研究者が目にする版がその後制作された複製である可能性すら考慮する必要が出てくる。Benderは、Benzingが目にしたテキストには問題となる記述が削除された版ではないかと主張しているのである（Bender同上.）。

いずれにしても、見本市通信に関して編集人、印刷人、発行人などが処分を受けたケースはまれとはいえないようである。Körberは上記のケース以外に、1602年春のケルンの見本市通信（編集人Friedliebs（筆名）、印刷人兼発行人Lützenkirchen）で発行人が幽閉処分されたケース、1603年春の見本市通信発行の際にマクデブルクでの事前検閲があったこと、さらに1605年やはりブラウンシュヴァイク侯Henrich Juliusの行状（変装かつ武装してブラウンシュヴァイク市について侵入し、市の防衛部署により撃退されたこと）を報道したライプツィヒの見本市通信に対する抗議とそれによる処分について報告している（Körber 2016, 69ff.および114.）。

印刷物の監督といえば検閲などの取り締まりばかりに注目が集まるが、権力者は自分の意向に沿った印刷物は流通させたい気持ちもあり、促進策としていわゆる印刷特権（*privilegium impressorium*）を利用していた⁷⁾。

印刷特権を認められた発行人や印刷人は競争相手に複製を制作させない方策として重要視した場合もある。1627年以降に限定されるが、見本市通信の

▶7 江口（2016a）参照。

「複製は印刷物関係法令により不可能となった。というのも当時存在した見本市通信はすべて、複製を刑法罰の対象とする印刷特権の対象となっていたか、他の保護措置を受けていたからである」(Körber 2016, 37.) もちろん、法律上の規制が常に完全に守られていることは保証のかぎりではない。

5 | 見本市通信のメディア史上の意義 —印刷新聞との関連—

Benderは「見本市通信の前書きがメディア史研究者にとっての金脈で」とありとし、「著者たちの自己理解と動機付け、問題や困難、ニュースのソースや性格、そして読者についての発言を含んでいる上に、競合する他者についての判断、増刷の告知、訂正や反論、一般的な時代の経過に関する表明も見つけられる」と述べている (Bender 1987, 64.)。実際、ここまで多くの先行研究を引用しているが、主張や指摘の根拠となっているのが「前書き」の記述である。

そうは言いながら、この見本市通信という印刷物と読者との結びつきについては、ここまで述べてきた通り断片的なことしか伝わっていない。Körberも「読者にとって見本市通信が何だったのか、つまり読者がその内容とどう向き合っていたのかについては……明確な情報が伝わっていない」と述べている。数少ない所有者の購入の日付と発行日との関係を見ると、「見本市通信は最新の報道媒体として購入されてはいなかったものであり、……むしろ一種の歴史著作もしくはニュース記録としてだった」と推定している (Körber 2016, 22.)。また、「見本市通信と読者の関係を……幾分かでも信頼でつながれた『読者と新聞・雑誌の結びつき』と想定するのは無理があり、「忠実な読者」というものが典型的ではなかった」と考えられる。その根拠が、現在の図書館などでの見本市通信の所蔵状況であり、特定の個人や組織が見本市通信（特に特定の発行人による）を集中的かつ継続的に収集した痕跡が認められない点である (Körber 2016, 23.)。見本市通信の継続性を保証し、その中断に対する責任を負ったのはむしろ発行人であった (Körber 2016, 23.)。

そうした背景の一因として考慮すべき点として、印刷物としての見本市通信が、例えば手書き通信 (geschriebene Zeitung) や史料編纂 (Historiographie) などと比較すると、見本市通信の「編集人にはニュースの収集業と著作者という二つの自覚が必要」という指摘がある。これが手書き通信や初期の印刷形態の新聞の場合にはニュースの収集業のみが該当し、史料編纂の場合は著作という作業が重点を占めているということが前提となっている。また手書き通信や印刷新聞では「数か月にわたる概観が簡単に見失われてしまう」ということはその通りであろう (Körber 2016, 24.)。こうした制作作業の質的相違として考えられるのは、見本市通信の場合には一定の経験の蓄積と時間が必要であったと考えられることである。「見本市通信が刊行され始めた最初の何年間、何十年間、どの編集人も、ニュースのどれを強調するのか、どう

- ▶8 Körberなどの研究者から批判されているが、上記の形式的な類似点以外にBehringerは、宗派的融和主義者としてのAitzingの思想信条的立場や、客観的、即物的記述(報道)をも指摘している。
- ▶9 このマーキュリーのイラストは、発行人Gottfried von Kempenのアイディアであり、フィレンツェのGiambolognaという芸術家の作品をもとにしている(Behringer 2003, 320.)。

整理するのか、どう提示するのかについての手順を自分で見つけ出さねばならなかった」というのである(Körber 2016, 25.)。ただし、史料編纂で歴史記述をするに際しても、一定の視点の確立が必要であり、手書き通信や印刷新聞でもニュースの信頼性や印刷物の監督との機微を感じ取るにはそれ相応の経験と試みが必要であろう。

こうした制作側の作業の質的相違点にも関わらず、Behringerが³Relation紙のような初期の印刷新聞と見本市通信との結びつきを強調する点が二つある⁸⁾。それが、タイトルと目印としてのマーキュリーのイラストである(Behringer 2003, 318.)⁹⁾。タイトルについては、次ページに、1603年Striegelにより編集された見本市通信と1609年ストラスブールで刊行されたRelation紙のそれを並列してみた。後者にとっては、正確な意味でのタイトルではなく、年初に購読者に送られた製本用の表紙ページと考えられる。双方に共通して“Relation”という表現(「報告、知らせ」の意)が使用されている。加えて取材対象となる地理的範囲を延々と挙げていることも見本市通信の流儀にしたがったものと言えるであろう。さらに使用される形容詞にも「すべての(all)」、「記憶すべき、言及すべき(gedenckwürdig)」などの共通点があり、ニュース商品として重要な事柄を網羅していることを強調している。

見本市通信のタイトル例	1609年版Relation紙製本版表紙
Relationes Historicae Das wahrhaftige Beschreibunge aller Gedenckwürdigen Sachen/so sich hin und wider in ganz Europa/als nemlich in Teutschland/ Holl-, See-, und Engellandt/Österreich/Ober- und Niderungern/Sibenbürgen/Walachia/ Moltaw/Polen/Preussen/Hispania/ Frankreich/Italia/Savoia/vnd an etlichen Orten in Türken Von der Herbstmeß Anno 1602 biß auff die Ostermeß Anno 1603 zugetragen und begeben haben/sampt einen Bericht etlicher Türkischer und anderer in Teutscher Sprach unbekandten Namen/welchen vund Ampten.	Relation; Aller Fürnemmen und gedenckwürdigen Historien/ So sich hin unnd wider in Hoch unnd Nider Teutschland/ Auch in Franckreich/Italien/ Schott und Engelland/ Hisspanien/Hungern/Polen/ Siebenbürgen/Wallachay/Moldaw/ Türckey/in diesem 1609. Jahr verlauffen und zutragen möchte. Alles auff das trewlichst wie Ich solche bekommen und zu wegen bringen mag/in Truck verfertigen will.

けっして同一視できないものの、世界での事件について継続的な印刷物が購入できるという商習慣や購読態度がやや広い購読者層にもたらされた点は、高価な手書き通信の契約者を除けば、見本市通信の隠れた大きな功績かもしれない。広義の定期刊行物としては、暦も低廉な価格のおかげで相当広範な購読者があったと考えられる。ただし、暦はもっぱら世の中の出来事について知らせるものではなく、太陽の運行や月の満ち欠けなど教会行事や農耕を中心として庶民が依るべき天文情報であり、年に1回のものである。半年に1回とはいえ、比較的最近のニュースを扱う見本市通信の購読の拡散によって、案外後に成立する印刷新聞(見本市通信の確立が1580年代とすれば、印刷新聞とは20年の時差がある)がさらに一段広い読者層にとって受け入れられる素地となった可能性はないだろうか。もちろん、手書き通信に比較す

れば、圧倒的に低廉な印刷新聞の購読契約料金も、それ以上に安価であった見本市通信の値段も重要である。Behringer (2003) が、当初週に1回というリズムで郵便が各都市を経由し、手紙などを集配したことが、当時の人々の生活リズムと意識を強烈に変えたのではと指摘していることになぞらえば、非常に限定された社会的指導層が手書き通信を週1回のリズムで受信していたことを、半年に1回でも半年分のニュースの記録を印刷物として確認できるやや広範な市民層（いわば中流層）が羨望の目でみていたであろうと想像できる。こうした購読行動は、社会言語学で主張される「社会的に積極的に評価され、威信（prestige）として認められる」社会的上位層の言語行動ないし消費行動として、模倣したい対象ではあったであろう。

参考文献

- 江口 豊 (2014) 「活版印刷術の展開と新聞成立との関連について」(研究ノート) メディア・コミュニケーション研究 67, 1-22.
- 江口 豊 (2016a) 「新聞成立期における印刷監督制度について」(研究ノート) 国際広報メディア・観光学ジャーナル 22, 95-112.
- 江口 豊 (2016b) 「フッガー通信について」(研究ノート) 国際広報メディア・観光学ジャーナル 23, 57-77.
- 江口 豊 (2017a) 「手書き通信について」(研究ノート) メディア・コミュニケーション研究 70, 37-58.
- 江口 豊 (2017b) 「多義的なメディア見本市通信について」(研究ノート) 国際広報メディア・観光学ジャーナル 25, 57-77.
- エンゲルジング, R. (1985) 文盲と読書の社会史. 思索社, 東京. (Engelsing, R. (1973) *Analphabetentum und Lektüre. Zur Sozialgeschichte des Lesens in Deutschland zwischen feudaler und industrieller Gesellschaft*. Metzler, Stuttgart.)
- Behringer, W. (2003) *Im Zeichen des Merkur. Reichspost und Kommunikationsrevolution in der Frühen Neuzeit*. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen.
- Bender, K. (1978) Eine Meßrelation Michael von Aitzings und Herzog Heinrich Julius. Der Anlaß für eine Intervention des Wolfenbütteler Hofes in Köln im Jahr 1590. In: *Wolfenbütteler Notizen zur Buchgeschichte* III, 286-289.
- Bender, K. (1984) Die Frankfurter Meßrelationen und Michael Kaspar Lundorp. Neue Funde aus den Jahren 1620-1627. In: *Wolfenbütteler Notizen zur Buchgeschichte* IX, 87-108.
- Bender, K. (1987) Die deutschen Meßrelationen von ihren Anfängen bis zum Ende des Dreißigjährigen Krieges. In: *Presse und Geschichte*. Saur Verlag, München, 61-69.
- Bender, K. (1994) *Relationes Historicae. Ein Bestandsverzeichnis der Meßrelationen von 1583 bis 1648*. Walter de Gruyter, Berlin/New York.
- Benzing, J. (1961) Der Zeitungsschreiber Michael von Aitzing und der braunschweigische Hof. In: *Archiv für Geschichte des Buchwesens*, 3, 1621-1626.
- Glüer, J. (2000) *Messrelationen um 1600 - ein neues Medium zwischen aktueller Presse und Geschichtsschreibung. Eine textsortengeschichtliche Untersuchung*. Kümmerle Verlag, Göppingen.
- Körber, E.-B. (2013) Das Selbstverständnis Michaels von Aitzing nach dem Zeugnis seiner deutschen Messrelationen. In: *Jahrbuch für Kommunikationswissenschaft*, 15, 5-27.
- Körber, E.-B. (2015) Zur bibliographischen Erfassung von Messrelationen. In: Stöber, R./Nagel, M./Blome, A./Kutsch, A. (Hrsg.) *Aufklärung der Öffentlichkeit - Medien der Aufklärung*. Franz Steiner Verlag, 11-22.
- Körber, E.-B. (2016) *Messrelationen. Geschichte der deutsch- und lateinischsprachigen*

- „messentlichen“ *Periodika von 1588 bis 1805*. edition lumiér, Bremen.
- Krieg, W. (1953) *Materialien zu einer Entwicklungsgeschichte der Bücherpreise und des Autoren-Honorars vom 15. bis zum 20. Jahrhundert*. Herbert Stubenrauch Verlagsbuchhandlung, Wien/Bad Bocklet/Zürich.
- Rosseaux, U. (2001) *Die Kipper und Wipper als publizistisches Ereignis (1620-1626). Eine Studie zu den Strukturen öffentlicher Kommunikation im Zeitalter des Dreißigjährigen Krieges*. Duncker & Humblot, Berlin.
- Rosseaux, U. (2004) Die Entstehung der Messrelationen. Zur Entwicklung eines frühneuzeitlichen Nachrichtenmediums aus der Zeitgeschichtsschreibung des 16. Jahrhunderts. In: *Historisches Jahrbuch*. Vol. 124, 97-123.
- Salomon, L. (1906) *Geschichte des deutschen Zeitungswesens. Von den ersten Anfängen bis zur Wiederaufrichtung des Deutschen Reichs*. Scientia Verlag, Leipzig. 2. Auflage.
- Schilling, M. (1990) *Bildpublizistik der frühen Neuzeit*. Max Niemeyer, Tübingen.
- Stalljohann, M. (2011) Der Kaufmann im Fokus der Meßrelationen. In: Bauer, V./Böning, H. (hrsg.) *Die Entstehung des Zeitungswesens im 17. Jahrhundert: Ein neues Medium und seine Folgen für das Kommunikationssystem der Frühen Neuzeit*. edition lumiér, Bremen, 115-134.
- Stieve, F. (1881) Ueber die ältesten halbjährigen Zeitungen oder Messrelationen und insbesondere über deren Begründer Freiherrn Michael von Aitzing. In: *Abhandlungen der historischen Klasse der königlichen Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, 16, 177-265.
- Stieler, K. (1969) *Zeitungs Lust und Nutz*. Vollständiger Neudruck der Originalausgabe von 1695. Carl Schünemann Verlag, Bremen.
- Stöber, R. (2005) *Deutsche Pressegeschichte*. UVK, Konstanz.
- Wittmann, R. (2011) *Geschichte des deutschen Buchhandels*. C. H. Beck, München.

(平成29年10月30日受理、平成29年11月22日採択)